

は之を以て沙門シャモンの轉訛かと思ふ、北邊の地一帯早くから佛教が入り沙門が往來したことは明かである、之等の沙門が時に醫師の役をつとめたり、野師の様なことをやつたりしたことも、他の類例にてらして承認することが出来る、佛教の勢力は漸次彼等の間に衰へて、而して沙門の名は沙門の事業に等しい様なことをやつて居る人の上に残つたのではあるまいか、それはともかく本題を追ふて蒙古のカムなるものが常にどんなことをやり、またどんな勢力をもち、どんなに敬重せられたものであるかを見ねばならぬ。

抑も當時蒙古民族の理想とするところは、世界の討平、蒙古大帝國の形成である、従つて彼等の最も重きを置くのは戦争であつて、戦ほど彼等にとつて重大な仕事はない、そうしてその戦のやり口を見るのに戦ふに先き立ちて先づ巫をして戦の日時吉凶等を卜せしめる、巫の卜した結果によつて戦は開かれるので、いくら軍略上好期と思はれても、よき占の出ない時には、戦ふことはしないのである、蒙古が征歐の軍をおさめたときにも、幾度も後戻りをして荒掠を再びしようとしたけれども、巫人がこれを許さなかつたとはルブルキーの語るところである、こういふわけであるから彼等の行軍には必ずこの巫者が随伴する、そうして戦の度び毎にその吉凶を卜するのである、汗の住居の邊には此等がなか／＼澤山居つた様である、ルブルキーの云ふところによると「彼等の數は頗ぶる多くて、その中に教長とも云ふべきものがある、常に汗の住居の前、一抛石位の處に住み、偶像をのせてはこばれる車は教長の看守に屬するのである、他の巫者は龍庭の後ろの方に居を占めて居つて茲に各地から彼等の術を信ずるものが集つて來る云々」ところやつて始終軍陣の間、汗の傍等に居る彼等は、戦争のこと以外色々なことに携はる、即ち生死冠婚すべて人間の大事には悉く干渉した様である、少しく詳かに述べて見るならば、小供が生れた時に先づ招